

「サイクリング」 大西賢氏 (東京都 40代)

今年の夏に、妻と山梨県の清里に行った。高原であり、避暑地である。清里駅に降り立ったときにはもう東京との気温の違いがハッキリ分かるほど涼しかった。私と妻は駅近くのレンタサイクルのお店に行き、自転車を二台借りた。ペンションへのチェックインまでは まだ時間があつたので、それまで二人でサイクリングをしようとなつたのだ。

私は大学時代、自転車競技をやっており、全日本の強化指定選手とも一緒に練習していた。脚には自信がある——。そう思って、きつい登り坂も頑張つてペダルを踏んだ。

ところが、妻は付いてこれられない。当然だろう。妻は自転車競技をやっていた訳でもないし、通勤で自転車を使っている訳でもない。登り坂で私と妻はだいぶ差がついてしまった。

「遅いなあ、早くしなよ」

何気なく私はそう言ったのだが、妻の返答にハッと我に返つた。妻はこう言ったのだ。

「もつとのんびり走ろうよ。誰かと競争している訳じゃないんだから」

—— 愚かなことに、妻にそう言われるまで、私は避暑地でサイクリングしていることを忘れていた。

自転車競技は他者との闘いである。着順を競うことが全てであり、順位を落とすことや、タイムが遅くなることは絶対にあつてはならないことだった。

だが、ここでは違う。私は妻と遊びに来ているのだ。暑い東京から離れ、涼しい高原で羽を伸ばしに来たのだ。誰かに追い抜かれたといつて歯をくいしばつてペダルを踏むのは愚かなことであり、同行者の妻を気遣つてのんびり走るべきだったのだ。

誰でも分かるようなことを分かっていたいなかった私は、妻に指摘され、気を取り直してのんびり走ってみることにした。すると、不思議なほど自転車が楽しくなった。

のんびり走っていると、色んなものが見えてきて、聞こえてくる。鳥のさえずり、見たことのない花、澄んだ空気の匂い——。それらは、自転車競技の練習中では決して感じられないものだった。

(ああ、運動つて、誰かと競うことが全てじゃないんだな)

当たり前のことをその時になつてようやく悟り、私は妻にお礼を言いたくなつた。登り坂でぐんぐんペースを上げ、妻に大差をつけた私が悪かつたのであり、のんびり走つて休みたい時には休む妻のほうが正しかつたことに、私はその時になつてようやく気が付いた。

あの時以来、自転車に乗るときはできる限りゆっくり走るようにしている。すると一緒に走っている妻も喜んでくれる上に、自転車が安全な乗り物であることも分かつてきて、すごく得をした気分になる。

あの夏のサイクリングは、私に大切なことを教えてくれた。